

ジャンージャック・ルソーの『エミール』 における女子教育論 そのIV

小 沼 和
佐 藤 良 吉

12 教育と結婚

(1) 人格と結婚の一致を目指す教育

『エミール』の第五編の主題が女性論と結婚論である教育的意義は『エミール』全編の統括として圧巻というべきである。それは、ルソー独自の主体的教育学が人間の誕生から男女の人間性の深奥を求めながら、自然の発達と教育の一致で両性の人格の完成を目指し、そして人格的關係に基づく結婚を开花させたことにある。すなわち、エミールの教育の最後の課題は結婚である。そして、その解決こそがエミールの教育の目的なのである。だから、エミールの教師は彼が人生の理想的伴侶ソフィーを見つけて、結婚するまで、その教育に責任があると考えている。そこでエミールは自らの人生と教育が形成した人格で情熱的にソフィーに正体して、行く手に横たわる結婚への障害と結婚が内包する諸問題を解決して、人格的結婚を掌中に収めるのである。それはまた、ソフィーについてもまったく同様である。しだかつて、ルソーの教育の目的は人間の幸福の創造に資する人格的結婚である。だから、ルソーの教育学は結婚と人格の一致を目指す教育の意義について、「自然の一致ということがあり、制度による一致ということがあり、人々の意見だけにもとづいている一致ということがある。両親はあとの二つの種類の一致の判定者で、子どもだけが第一の種類の一致の判定者だ。父親の権威によってむすばれる結婚は、制度による一致と意見

にもとづく一致だけに従ってきめられる。結婚させられるのは人ではなく、身分と財産なのだ。けれども、そういうものはみんな変わるかもしれない。人だけはいつまでももとのままで、どこへいっても一緒にいる。運命がどうであろうと、人格的な関係によってこそ、結婚は幸福にもなり不幸にもなる。」(第五編 P.97) とルソーは「自然の一致」を原理とする人格的な関係による結婚こそが、夫婦の人格を命あるかぎり形成し続けるもので、それはまさに、教育の神髄であるとの見解を明示している。

また、ルソーは人格的結婚を志向する男女の人格形成と人格的結婚が男女の内面の感情と才能を活性化して、家庭生活を通して両性の心を心底から揺り動かし、夫婦の親密な間がらを創り出すと共に、二人の人格を夫婦の一致としての人格にまで形成し続ける人生が、とりもなおさず、わが子への夫婦の主体的教育であると考えている。だから、ルソーにとって眼前の社会規範の人為性の結婚は自然の原理に反するがゆえに、自然の原理に基づく人格的結婚を教育の主題としているのである。しだかつて、両性の自由な意志による結婚は人格関係による結婚でなければならない自然の原理を、自らの教育の原理として、その実現を自らの著書『エミール』で具現したのである。

そこで、ルソーは自らの教育学の展開の形態を『エミール』の第一巻の中途から登場するエミールという名の少年の成長過程とその教育を、エミールとその教師との人間的師弟関係を中心に『エミール』を構成したのである。ところが、ルソーが考えていた以上に第四編の後半から登場するエミールの心の伴侶としてのソフィーによって、エミールとその教師の人格尊重の教育関係は、その師弟に人生についての本質をより一層深めさせると共に活力をも増幅させながら、エミールの人間的成長発達と人格形成を着実なものとして生彩を放つのである。それに、ルソーの教育学は、自然を原理とする教育であるといわれるが、何が自然かといったら、ソフィーの登場こそが何物にもまして自然の教育そのものであって、それは、教育の

すべての条件を満たして余りある男女の一致による理想的な教育なのである。それはすなわち、エミールが日頃求めてやまない自分自身への理想的な教育との得難い出会いなのである。したがって、エミールの自己教育に生命を吹き込んだのは、ソフィーの登場なのである。だから、ソフィーの登場によって「青年にたいしてはけっしてひからびた理屈を言うてはいけない。道理をわからせたいと思ったら、それに肉体をあたえるがいい。精神のことばを心情からはいらせ、それが理解されるようにするがいい。くりかえして言うが、冷静な議論はわたしたちの意見を決定するかもしれないが、わたしたちの行動を決定しない。わたしたちに信じさせるが、わたしたちを行動させない。どう考えなければならないかを教えるが、なにをしなければならないかを教えない。すべての大人にとってこれは真実だとするなら、まだ感官につつまれていて、想像するかぎりにおいてのみ思考する青年にとっては、なおさらのことだ。」(第四編 P.239) という、青年エミールが求めている自分への教育を、その教師に発想させるのである。そして、その人間教育が必然的にソフィーとの人格的結婚への道を開きやがて実現させるのである。したがって、ソフィーがエミールの想像上の理想的な愛人としてエミールの内面に登場してからのエミールは、「自然、人間、事物」との教育関係の一致を、今までにまして真実自らの人格の完成に受容したことはいうまでもない。すなわち、ソフィーとエミールとそして、その教師の三人の人的教育関係が織り成す人格形成と結婚の一致は、ルソーの教育学と方法論の集大成であり、それは、ルソー独自の人間中心の教育学の確立である。

(2) ルソーの教育学の中核としての結婚

ルソーの男女観は「エミールが男であるようにソフィーは女でなければならない。つまり、その種と性の構造にふさわしいすべてのものをもって、自然と道德の秩序のうちにその地位を占めていなければならない。」

(第五編 P. 5) とルソーは男女の不平等を明確に示している。すなわち、男性と女性は身体的にも精神的にも同等ないし同質的ではなく不平等であるという見地に立っている。ただし、この不平等は人為的なものではなく自然的なもので、男女が協同して自然の方向に歩むためのものであるとの見解である。したがって「男女の相互関係は驚嘆すべきものだ。その関係から一個の道徳的人格が生じ、女性はその目となり、男性はその腕となるのだが、しかし、両者は相互的な依存状態におかれ、女性はある必要のあるものを男性から教えられ、男性はなすべきことを女性から教えられる。もし、女性も男性と同じ程度に根源にさかのぼることができ、男性も女性と同じ程度に細かいことに気がつくとすれば、両者はいつもたがいに独立していて、たえまない不和のうちに生き、相互の関係はうまくいかないことになる。ところが両者のあいだに支配する調和によって、すべては協同の目的に向かって行く。どちらがいつそう多く自分のものをもちているかわからない。それぞれが相手の衝動に従っている。それぞれが服従しながら、両者ともに主人なのだ。」(第五編 P. 48) とのルソーの男女論は、男女の精神的、身体的特徴を全人的に考究して、男女の差異の自然的不平等を形而上学的に認識することによって、男女の自然的不平等を男女が日常主体的に、人格形成に、生かす自然の原理に従って生きる生活の知恵の卓越性に感得し畏敬して、それを自らの男女の一致の教育の根本理念としている。すなわち、男女の自然的不平等を最高の価値として、ルソーは自らの教育学を確立し展開している。

したがって、ルソーは人間の幸福の創造は、男女の個性の相互理解に基づく協力的人格の形成から始まると考えている。そこで、ルソーは『エミール』の第五編の主題を女性論と結婚論として構成して、『エミール』全編の教育論の統括としている。すなわち、エミールの教育の最後の課題は人格的結婚である。だから、エミールの教師すなわちルソーはエミールの人生の理想的伴侶であるソフィーを見つけて、二人が結婚するまでの教育

に、自らの教育理念と経験を以て全生涯をかけているのである。だが、それだけではない。エミールの教師すなわちルソーは彼の結婚が創造する家庭とその教育を視野に入れている。それは、エミールがソフィーと夫婦の一致をはかって、家族の人格形成に資する家庭教育を、ソフィーを中心に行うことを念頭においてのことである。さらにルソーは人格的結婚の意義を考究して、人格的結婚が必ずしも夫婦の幸福の創造を保証するものではないことを知っている。たとえ人格的結婚であっても、また、相互の人格を夫婦の人格として形成したとしても、それだけでは夫婦の幸福とはなり得ないのである。ルソーにとっては女性の責務を家庭生活の中心的存在として位置づけ、なんとしても家庭教育に専念してもらいたいとの思いが深いからである。それが、家族の人間的な愛情に満ちた家庭の創造となり、同時に家族の協力による人格形成を理想的に実現させるからである。それこそが、夫婦本来の幸福であり、人格的結婚の真価である。そして、それは女性の身体的特徴と得難い内面の自然の感情と才能のすべてを発揮する場を、ルソーは自らの自然の教育理念の中核に設定することによって、女性の社会的役割と存在を明らかにしたいと考えたからである。したがって、ルソーの教育学の中心思想は両親による家庭教育であることは、同時にその教育の中心的存在を実質的には母親と考えてのことであるから、女性すなわち、母親が家庭教育の中心にいなければルソーの教育学は存在意義を失うことになる。さらに、ルソーの教育学の確立の背景には、ルソーの目に映ったパリのサロンの貴婦人たちが家庭生活の美德をまったく省みなかったことに対する厳しい批判が、逆説的にルソーの女性観を理想化させたのである。すなわち、それは女性に対する畏敬と女性に内在する母性へのあこがれである。まして、母を知らずに大人になったルソーの心情の中に、母性を理想化したのも、母親への思慕の念を深めるルソーの境遇が、不断に生活と社会の現状の中で、母親の家庭教育を中核とする教育を思索し続けさせていたからに他ならない。

したがって、ルソーが『エミール』の教育学の構成と展開において、結婚論をより具体的に生々しく、すなわちエミールとソフィーの人格的結婚を志向する人格形成と人格的結婚を自分の教育学の中核に据えて、被教育者主体の教育学を樹立したことは、教育学にとって先例を見ない快挙である。それでなくても結婚は男女の内的矛盾と複雑さを、いっそう複雑化するのみならず、いったん内的齟齬をきたせば、これとって決定的な解決方法のない男女の営みである。それなのにルソーはその多難な結婚生活と人生を十二分に知り尽くし、苦悩したうえで、人間の内面の深層を対象とする教育学に、あえて主題として、男と女の愛と憎悪が錯綜する不可解な結婚を採り入れるということは、一見暴挙とも思われるが、教育が人格の完成を目指すものであるからには、結婚が男女の内的問題のすべてを内包し、解決のない男女の未知の人生に、解決を与えるものは、教育以外になにもものも存在しないとの究極の究明があつてのことである。したがって、ルソーが自らの教育学の中核に結婚を据えたことは、暴挙ではなく、これこそ自然を原理とする教育学には、絶対的必要条件として実存させなければならない存在であつて、結婚を教育の主題としない教育は教育学としての存在意義を失うことになる。すなわち、ルソーの教育の概念は教育を極限までひろげて、「教育」と「生活」を同意義と考えて、その一致をはかることにあるとの教育的意義の内奥の哲学は、人間の最大の人生の課題である結婚が教育の主題として、その中核に厳然と輝きつづける教育でなければ教育ではないという教育学なのである。なぜならば、結婚への道程と結婚、そして結婚生活こそが、人間に内面からの教育を自然の原理に従つて教育させるからである。これこそがルソー独自の人間主体の教育学というべきで、面目躍如たるものがある。

(3) エミールとその教師の人間関係と教育

ルソーの『エミール』の教育学の構成には二つの特徴がある。その一つ

は既に述べた結婚をその教育学の主題としていること。二つには対蹠的な境遇のエミールとソフィーを登場させたことである。すなわち、エミールは孤児であるが、ソフィーはそうではないという境遇のちがいは、必然的に二人の環境と教育のちがいとなって、その人格形成に本質的な影響を及ぼすことになる。そこで、二人の生活環境には十分配慮すると共に、人間と人間の関係で成立する教育については、直接教育に当る親や教師の人格と教育観が問われることから、ルソーは自分自身の人格と教育観とをその親と教師に付与している。つまりルソーが対蹠的な境遇と性の異なる二人の子どもを『エミール』の教育学の展開の主役としたことは、教育がかかえている教育原理及び方法と社会規範としての男女不平等などに内在する問題を解決する教育学と方法を、二つの角度すなわち境遇のことなる二人の子どもの教育と男女不平等などの社会規範に立って止揚し確立しようと思図していたからである。だから、ルソーはその親と教師に自分の人格と教育観を付与した以上に、二人の子どもに自分の人生を投影しているのである。したがって、個々の子どもに内在する自己教育と社会の諸問題の問題解決に資する子どもの個性を生かす教育は、子どもの自己目的性を尊重する児童中心の教育、すなわち、ルソー自身が求めていた自分のための教育原理なのである。だから、ルソーの教育学と方法が深遠かつ重厚である所以は教育に関する問題と人間社会に関する問題の解決の指針とも原理ともなるものであるからに他ならない。

したがって、その教育はエミールの場合、誕生から一人の家庭教師が彼の両親の義務と権利のすべてを受けついで行うのである。一方ソフィーは、両親による家庭生活を中心に教育されるのである。そこで、エミールが一人の教師によって、どのように教育されたか、また、ソフィーはどのように両親に教育されたかを考察することにする。

『エミール』の第一編の中途から登場するエミールという名の少年は「エミールはみなし子である。父と母があっても同じことだ。父母の義務

をひきうけるわたしは父母の権利のすべてをうけつぐのだ。エミールは両親をうやまわなければならないが、わたしにだけ服従しなければならない。それがわたしの第一の、というより、ただ一つの条件である。この条件に、その当然の結果として、わたしたちの同意がなければ、わたしたちはたがいに離れることはないという条件をつけくわえなければならない。」(第一編 P. 53) というおいたちである。そして、その教師はエミールと生活を共にしながら、彼の教育に全責任を持つのである。そして、その教師の教育は「かれらがおたがいに、一緒に生活しなければならないものと考えれば、おたがいに愛し合うことが必要になり、それだけでまた、おたがいに親しい存在となる。」(第一編 P. 54) という生活中心の教育を教育の原理と考えている教師である。だから、一緒に生活することから、最も自然なかたちで教育と生活の一致をはかる教育を始めるのである。

したがって、『エミール』の教育学は、日々成長するエミールとその教師の二人の人間的な教育関係の中で構成され展開されているのである。しかし、エミールと一人の教師との教育的関係に終始するという条件設定には無理があり非現実的であるがルソーの思想を自由に教育に展開するためには、不可欠なものであると共に、教育の本質を純粹に理論的に展開するためにも、必要な便宜的方法なのである。それに、エミールに関していえば、何ら家族関係をもたず、隣人や友人など対人的社会的交渉関係がその教育の中から、まったく除外されているということは、はなはだしく非現実的である。また一人の教師が、エミールが生まれてから25年間もただ一人の子どもの教育に専念することは事実上ほとんど不可能であろうし、仮に可能であるにしても、實際上それが望ましいかどうかは疑問であろう。しかしながら、このような条件設定は教育論を展開するために必要な外的象徴的条件にすぎないのであって、ルソーの教育論の原理に内面的実質的に、いささかも関連する条件ではないのである。

そこで、エミールとその教師の人物についてであるが、「エミールはた

ぐいまれな人間ではない。」(第五編 P. 82) 平凡な子どもである。しかし、その教師は人格、識見ともにそなわった理想的な教育者である。それは『エミール』全編、特に第一編の初めからエミールが登場するまでに述べられている彼の主体的教育論からも明らかなように、その教師の学識、経験、教育愛、人間愛、指導力などすべてにわたって、勝れた教育者であることが理解できる。したがって、「わたしにだけ服従しなければならない。それがわたしの第一の、というより、ただ一つの条件である。」と断言してはばからないルソーの理念として、また精神としての教師を、ルソーが登場させたのは、教師をえらぼうにもえらびようのないエミールの立場で教師をえらんだのはルソーの児童中心の教育思想のあらわれである。それにエミールにとっては、自分の教育に関心をもつほどの者は自分と運命を共にするだけの誠意と愛情の持主でなければならないし、まして25年間教育はつづけられなければならないことから、自分自身にとっての教育はただ一度で二度くり返されることのない宿命としての人生を、教師の側にそのまま転じて、師弟共にやりなおしのきかない教育の絶対性に鑑みて、ルソーはエミールの教師にふさわしい人格者を彼の教師としたのである。

したがって、『エミール』の「教師」はルソーの教育者の理念と精神とを象徴したものに他ならない。そしてルソーは、その教師による教育を観念的、抽象的に論じたのではない。まず教師自らが教育される者の立場に身を置き、教育される者の立場で教育を検討しながら師弟一体での教育実践を通して教育を論じているのである。すなわち、著者ルソーは『エミール』の中で「教師」と「エミール」の中にいるのであるが、その度合いは「教師」の中にいるよりも、よりいっそう「エミール」の中にいると考えられる。それとその教師の教育原理は三つの教育の一致である。『エミール』の冒頭の「この教育は、自然か人間か事物によってあたえられる。…完全な教育には三つの教育の一致が必要なのだ。」それをルソーは、その教師すなわち自分に強く求めているのである。さらに彼自身、自分が子

どもであった時その教育を切望していたので、その教育を受けることができたらどんなによかったかとも思っている。そして、その教育の実践にあたっては、「よく導かれるには子どもはただ一人の指導者に従うべきだ。」

(第一編 P. 32) と教育の方向の一致すなわち、教師は一人でなければ子どもに影響するあらゆる教育力が分裂してしまうことを指摘している。そのことについてルソーは、『エミール』の中の多くの箇所でも主張し指摘もしている。だから、ルソーがエミールの教師を登場させた時に「エミールはみなし子である。父と母があっても同じことだ。父母の義務をひきうけるわたしは父母の権利のすべてをうけつぐのだ。」といったのも「一致の原理」を教育の原理と考えて、エミールが終始ただ一人の教師からのみ教育を受けることを絶対条件としたのである。それは家庭教育が、「父母の一致」でなければならないのと同じの原理である。

しかし、ルソーが『エミール』の中でエミールとその教師との、水ももらさぬ師弟関係で教育の本質を純粹に論理的に展開し論じていることに鑑み、ルソーは親が直接、自分の子どもを教育する義務を、だれか適当な教師が見つかったら、その人に委託してもよいというような思想をもっているのではないかと考える人もいないわけではなかった。それは、当時のパリのサロンの婦人たちが家庭生活の美德をまったく省みなかったことからもうなづけるのである。だが、ルソーは、そのような思想は全然もっていないのである。それどころか、ルソーが最も情熱を込めて強調していることは、父母には自分の子どもを自ら教育する義務があるという教育観である。したがって、ルソーのその考えを自然に素直に純粹に受容するのは教育を受ける立場にあるエミールをはじめとするすべての子どもたちである。すなわち、教育を受ける立場のエミールの両親による家庭教育の受容の真意は、両親の愛による家庭教育は自分の教育について一切の環境と条件を、教育的に一致に統合するように整えるにちがいないという確信以前の先天的受容である。その受容に応える教育をルソーは『エミール』の中で、

エミールとその教師の人間関係の一致の深化を中心に、教育の主体をエミールにおく愛の教育によって、その実現をはかっている。つまり、ルソーは教育する者の立場を離れて、教育を受ける者の立場から教育を考えている。それは、何事においても、親が自分より子どもの自己目的を優先すると共に、子どもが親を愛し親に学ぶ親子の感情の自然性を教育の原理としているからである。したがって、ルソーは父母には自分の子どもを自ら教育する義務があること、また、女性の責務を家庭内に見出そうとしていることなどはすべて、子どもから始まる児童中心の教育観であり、それは子どもの生命が求める自己目的性から教育は出発することへの認識である。だから、ルソーはそのことをだれよりも家庭生活で直観して認識を深め、教育に役立てている両親の地道な教育を『エミール』全編で、あらゆる箇所指摘して、父母は親であると共に教師であることの自覚を訴えている。

「大きな道路から遠ざかって、生れたばかりの若木を人々の意見の攻撃からまもることをこころえた、やさしく、先見の明ある母親よ、わたしはあなたにうったえる。若い植物が枯れないように、それを育て、水をそそぎなさい。その木が結ぶ果実は、いつかあなたに大きな喜びをもたらすだろう。あなたの子どもの魂のまわりに、はやく垣根をめぐらしなさい。垣のしるしをつけることはほかの人にもできるが、じっさいに障壁をめぐらせる人は、あなたのほかにはいない。」(第一編 P. 23) 「問題をただ肉体的な面からのみ考えていいものだろうか。子どもは乳房と同じように母親の心づかいを必要としているのではないか。」(第一編 P. 38) 「母親がすすんで子どもを自分で育てることになれば、風儀はひとりでに改まり、自然の感情がすべての人の心によみがえってくる。」(第一編 P. 40) 「人間がその生来の形を保存することを望むなら、人間がこの世に生まれたときからそれを保護してやらなければならない。生れたらすぐにかれをしっかりとつかんで、大人にならないうちはけっして手放さないことだ。そうしなければとても成功はおぼつかない。ほんとうの乳母は母親であるが、同じよう

にほんとうの教師は父親である。父と母とはその仕事の順序においても、教育方法においても完全に一致していなければならない。母親の手から子どもは父親の手に移らなければならない。世界でいちばん有能な先生によってよりも、分別のある平凡な父親によってこそ、子どもはりっぱに教育される。(第一編 P. 45)「父としての義務をはたすことができない人には父になる権利はない。貧困も仕事も世間への気がねも自分の子どもを自分で養い育てることをまぬかれさせる理由にはならない。読者よ、わたしのことばを信じていただきたい。愛情を感じながら、こういう神聖な義務を忘るような者にわたしは言うておく。その人は自分の過ちを考えて、長いあいだにがい涙を流さなければならないだろうし、けっしてなぐさめられることもないだろう。」(第一編 P. 46) とルソーは自らの教育学の神髄である父母による家庭教育の絶対的必要性について、自分の反省に基づいて真情を吐露している。

しかし、エミールは孤児なのである。一人の教師が一人の生徒を、誕生から25歳になって結婚するまで、教育する『エミール』という物語には、家庭生活の実際についての記述はないのに、文脈と行間からその家庭生活を髣髴とさせ、匂いさえ感じさせる。要するに、エミールの教師は親の替りをしているのではなく、不実な父親の悔恨から自分の子どもを自分で教育する父性に目覚めた思慮深い父親としてのルソー自身なのである。本来、家庭教育に始まる子どもの教育は親が教師なのであるから、エミールの教師もまたエミールの親なのである。したがって、エミールは自然に素直で純真な子どもになれるのである。そうであるからエミールとその教師の関係は師弟であり親子なのである。だから、「子どもを愛するがいい。子どもの遊びを、楽しみを、その好ましい本能を、好意をもって見まもるのだ。口もとにはたえず微笑がただよい、いつもなごやかな心を失わない年ごろを、ときに名残り惜しく思いかえさない者があるろうか、どうしてあなたがたは、あの純真な幼い者たちがたちまちに過ぎさる短い時を楽しむことを

さまたげ、かれらがむだにつかうはずがない貴重な財産をつかうのをさまたげようとするのか。あなたがたにとってはふたたび帰ってこない時代、子どもたちにとっても二度とない時代、すぐに終わってしまうあの最初の時代を、なぜ、にがく苦しいことでいっばいにしようとするのか。父親たちよ、死があなたがたの子どもを待ちかまえている時を、あなたがたは知っているか。自然がかれらにあたえている短い時をうばいさって、あとでくやむようなことをしてはならない。子どもが生きる喜びを感じるができるようになったら、できるだけ人生を楽しませるがいい。いつ神に呼ばれても、人生を味わうこともなく死んでいくことにならないようにするがいい。」(第二編 P. 101) と人間が人間的でなお人間愛をもって、人生を生きる幸福感のすばらしさは、子どもの時代の教育によって、その人格の基礎が形成されることから、ルソーは子どもの心と生活を尊重する愛の教育を強調しているのである。そして、その思想どおりに、エミールの教師はエミールの自然の発達を受容して大切に育てているのである。だから、生まれる前から子どもは両親の子どもであり、親には子どもが生まれる前から子どもへの愛と理想があるのだから、その愛と理想を教育に生かして子どもの成長に役立てないという手はないのである。

それには子どもは自然の子どもでなければならないのである。両親による家庭教育は子どもを自然の子どもから、自然の子どもへと教育する環境と愛情を兼ね備えているのだから、自然の子どもの無限の可能性を傷つけることなく成人させなければならない義務があるのである。したがって、エミールの教師は「エミールはみなし子である。父と母があっても同じことだ。父母の義務をひきうけるわたしは父母の権利のすべてをうけつぐのだ。」と汚れのない自然の子どもエミールを受け継ぐにあたって、エミールの両親の愛情とその環境の人間的豊かさをも受け継ぐことを肝に銘じて決意のほどを示しているのである。それはまた、ルソーが『エミール』の冒頭で「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、

人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」と述べている人間観と教育哲学を継承して、エミールの教育の原理とするという意志表明である。だから、「父と母があってもおなじことだ」というのは、父母があろうとなかろうと教育は子どもの誕生から始まるのである。特に子ども自身の学習は教育される前から始まっていることを銘記すべきである。「わたしたちは生きはじめると同時に学びはじめる。わたしたちの教育はわたしたちとともに始まる。」(第一編 P. 32) すなわち、教育は子ども自身の自己教育と父母の教育の一致によって成立するものであるから、子どもの誕生と共に始まる教育は父母の喜びであり義務であり権利である。そこで、エミールの教師は自然の子エミールを自然の子として教育することによって、エミールの可能性を彼自身が引き出す自然の教育に終始するのである。

したがって、ルソーは父母には自分の子どもをみずから教育する義務があること、また、女性の責務を家庭内に見出そうとしていることなどは、すべて子どもから始まる児童中心の教育であり、それは子どもの生命が求める自己目的性から、教育は出発することへの認識である。だから、ルソーはそのことをだれよりも家庭生活で認識を深め、教育に生かしている両親の地道な家庭教育は、夫婦の教育の一致の源泉であると共に、夫婦の間での相互教育がなければ、その泉は涸れてしまうことを指摘している。すなわち、エミールの教師はエミールの全生活が現在、エミール自身によって理想的であると感じる存在であってこそ、エミールにとって現実的であると考える、エミールの存在の日々が自己目的そのものであるようにエミールから始まる教育を、エミールとの教育の一致で実践しているのである。

それはあらゆる教育活動が、人間の生命の自己目的の絶対性の感得ないし認識から出発しなければ教育ではないということである。したがって、一人の教師のエミールが生まれてから25歳になって、結婚するまでの教育の過程は、まさに父親としての教育そのものであり、エミールの人生の創造であると同時にその教師の人生の創造でもある。すなわち、一人の教師

とは著者のルソーであるが、感情の上ではそれよりもっと多くルソーはエミールであった。そのことについて、押村喪氏は著書『教育観の転換』で「誰かを教育しようという気持ちより、むしろルソーは自分自身の生まれて以来の教育、すなわち生涯を、記憶のあるかぎりたどって、その回想を主軸にして、少年ジャンージャックに実現しなかった夢を想像上の少年エミールに託したのである。」(P. 193) と述べている。

したがって、ルソーは自分自身が求めてやまなかった教育への願望から、教育の目的は人格的結婚を目指す人格形成でなければならないと独自の人間主体の教育学を確立したのである。すなわち、ルソーは教育が結婚を目指す身体と精神の全人的教育活動でないとしたら、教育はいつまでも非現実的な架空と抽象の世界をさまようことになると考えている。だから、ルソーはエミールとソフィーの人格的結婚を目指す教育によって、自分の教育学に生命を与えて、非現実的な人間不在の抽象的世界をさまよう教育を現実に引きもどして、人間の存在即教育とするのである。そこで、ルソーの『エミール』の教育学の原理とも特徴ともいえるものを挙げてみることにする。第一には両親による家庭教育を教育の中心に据えている。第二は教育の概念を極限までひろげて、「生活」と「教育」を同意義と考えて、その一致による生活教育（教育は人間とともにある）。第三は教育の主体は教育する者ではなく、教育される者にあるのであるから、親や教師の教育は極限まで抑制され本質化される必要がある。第四は自然の原理に基づく人間の自然の発達に即した教育。以上の四点である。それらを集約するとそれは、ルソーが生涯求めてやまなかった自分への教育である。すなわち、「この教育は自然か人間か事物によってあたえられる。」(第一編 P. 24) ということである。したがって、どんな時にもまた、いたるところに教育は人間と共にあるということ、なかでも結婚生活こそが夫婦の生涯を通しの教育活動の精華である。したがってルソーはエミールの教育の原理をソフィーの教育の原理とするのである。

(4) ソフィーの父母による教育とその原理

ルソーは『エミール』に、対蹠的な境遇のエミールとソフィーを登場させ、二人が生まれてから結婚するまでの教育について論じている。その教育は両者が協同して自然の方向に歩むための人格形成であるから、その教育の原理も同一でなければならないと考えている。その二人は地域を異にして暮らしていたので、会う機会もなくまったくの他人同士として、独自の道を歩いている。しかし、ルソーは二人を結婚させようと意図していたので、エミールが青年として官能の盲目的な本能にしたがおうとしていたその時、「あらゆる種類の教育には心得ておかなければならない適当な時期があり、さげなければならぬ危険がある。」(第四編 P. 250) ことから、エミールの人生を全面的に彼の内的蓄積すなわち精神によって自分の理想を高度に生かす自己教育の時は今だと判断して、「きみの心は伴侶をもとめている。きみにふさわしいひとをさがしにいこう。わたしたちはたぶん、そのひとを容易にはみいだせまい。ほんとうにすぐれたものはいつも稀れにしかないからだ。けれども、あわてることはないし、がっかりすることもない。たしかにそういうひとはいるし、いずれわたしたちはそのひとをみつけることになる。でなければ、とにかく、そのひとにいちばんよく似たひとをみつけることになる、と。こういう楽しい計画をもって、わたしはかれを世間へ導いていく。」(第四編 P. 251) と教師すなわちルソーは、心身共にほれほれとするほど立派な男性に成人した思慮深い、エミールが思いのたけをかたむけて、心に理想の伴侶を描いてやまない秘めた情熱に時を移さず応えたのである。だが、ルソーは自分がエミールに与えるつもりが、はたしてエミールが描いている伴侶と一致するかどうか不安であった。それでもルソーはあえてエミールの伴侶としての女性の肖像を彼に描いてみせたのは、自分とエミールの求める女性は必ず一致するにちがいないと確信していたからである。なぜならば、一人の教師のエミールの教育とその成人ぶりにルソーは満足していたからである。

もちろんルソーはエミールの人格、識見、好みなどを熟知したうえで、彼の恋人を描いてみせたのであるから、彼がルソーの話に耳を傾け、その人こそ自分が求めている貴重な資質を持つ、愛さないではいけない人、と思わないではいけないはずだと確信しながらもエミールには彼独自の女性観が理想的な伴侶を描いていることと、恋は思案の外でもあれば不安であった。だが、それは杞憂であった。その女性はエミールが日頃心に描いていた人でもあった。だから、エミールにとってはその恋人が想像上の人であってもその人は自分の全感情がはげしく求める愛しい美德の人なのである。したがって、その人を理想の恋人として思いを深め愛を育てて、よりよい人として成長してやまない理想の女性の想像を、たくましくして人格化するのである。だから、彼は自分を誘惑するおそれのあるすべての対象を嫌悪し排除して、心の恋人に忠誠を誓うのである。したがって、教師すなわちルソーはエミールと共に想像上の女性をより理想的な女性として人格化すると共にエミールの対象への思いを内面化するのである。そしてなお、真実性を与えるために「あなたの未来の愛人をソフィーと呼ぶことにしよう。ソフィーは幸先のいい名前だ。あなたの選ぶひとが、こういう名前をもっていなくても、そのひとは、少なくとも、こういう名前をもつのにふさわしいひとだろう。わたしたちは、あらかじめそれに敬意を表してもいいのだ。」(第四編 P. 253) と教師すなわちルソーが、客観的にソフィーの美德について淡淡と話すのを聞いて、エミールはたとえ想像上の人であっても、ソフィーは自分の心の恋人であると決めているからには、その思いをつのらせ彼女を實在の人として、疑念を確信に変えていくのである。

たしかにエミールが心の恋人として描いているソフィーは、その想像の人以上の理想的な女性に成長している。その理想的女性としての人柄について、ルソーは「愛らしくしとやかな十六歳の娘、口かすがすくなく、人の言うことに耳をかたむけ、動作にたしなみの深さを示し、ことばにまじ

めな考えかたをうかがわせる娘，美しさも自分の性と若さを忘れさせることなく，臆病な態度そのものによって人をひきつけ，すべての人に尊敬をはらうことによって自分を尊敬させることをこころえている。」（第五編 P. 76）と謙虚でたしなみを心得た愛らしい匂うばかりのういういしい娘に成長した花恥ずかしい女性らしい女性を表現している。そして，ルソーはエミールとソフィーの結婚の基本的条件として「エミールはたぐいまれな人間ではないし，ソフィーもまたそういうものではない。エミールは男，そしてソフィーは女だ。これがかれらの名誉のすべてだ。わたしたちのあいだに支配している性の混同を考えれば，自分の性にふさわしい者であるということはたぐいまれなことともいえよう。」（第五編 P. 82）と述べているのは，エミールとソフィーの教育が共に自分の性を尊重し確立して，自己目的を自覚するまでに成長したことの確認である。それは，当時のフランスの社会の若い男女のなかには，自分の性を健全に育てようとしない自然の原理に反する精神的墮落の風潮に対するルソーの厳しい批判があったことである。したがって，ルソーは『エミール』の第五編の冒頭で，「大人が独身でいるのはよくない。エミールはもう大人だ。わたしたちはかれに妻を約束した。かれに妻をあたえなければならぬ。その妻はソフィーだ。」（第五編 P. 5）と『エミール』の第五編の主題が女性論と結婚論であることを明確に示すと共に，その教育の原理を次のように述べている。「エミールが男であるようにソフィーは女でなければならない。つまり，その種と性の構造にふさわしいすべてのものをもって，自然と道徳のうちにその地位を占めていなければならない。」（第五編 P. 5）すなわち，エミールとソフィーは自分の性にふさわしい健全な身体を持つと共に，内面に人格と精神的人生観を形成していることから，結婚の条件をすべて満たしているので，いつ結婚してもよい状態にある。問題はいつそのような人にめぐり会うか，また，自分の伴侶としてふさわしいかどうか決断することだけなのである。

(5) ソフィーの趣味の形成と家庭教育

そこでルソーは「わたしがエミールに描いて見せた肖像によって、また、エミール自身が自分を幸福にしてくれる妻を想像しているとおり、ソフィーの人柄についてかんたんに述べることにしよう。」(第五編 P. 82) とソフィーに対する両親の家庭教育中心の教育が形成したソフィーの人格とルソーの描いた肖像とそして、エミールの想像とが完全に合致している。そのソフィーの人格の形成について、家柄、容姿、趣味にわたってルソーは好意をもって述べるのである。そこでルソーのソフィー観とその教育について記することにする。家柄は「生まれのいい善良な天性をもつ女性である。」(第五編 P. 82) 容姿は「美人ではない。けれども、彼女のそばにいと、男性は美しい女性たちのことを忘れてしまうし、美しい女性たちも自分に不満になってくる。一見したところでは、彼女はきれいだともいえないくらいなのだが、見ているうちにだんだん美しくなってくる。ほかの多くの女性たちが失うところで、彼女は獲得する。そして、獲得されたものはもう失われない。もっと美しい目、美しい口、もっと人の目に立つ姿のひとはいるかもしれない。しかし、もっと均整のとれた体、もっと美しい顔色、白い手、かわいい足、やさしいまなざし、印象的な容貌のひとはいないだろう。彼女は人を眩惑させはしないが、人の関心を引き起こす。彼女は人を魅惑する。しかし人は、それはなぜなのか言うことはできない。」(第五編 P. 83) 趣味は「身を飾るものを好んでいるし、それについてよく知ってもいる。ソフィーの母親にはソフィーのほかに別に小間使いはいない。ソフィーは豊かな趣味をもっていて、じょうずに身じまいをする。けれども、ぜいたくな衣装はきらいだ。……彼女のように無造作に身じまいをしているように見えながら、凝った服装をしている若い女性は一人もいない。……彼女は見かけはひじょうに質素な身なりをしているが、じっさいはひじょうにおしゃれなのだ。彼女は自分の魅力をひろげて見せるようなことはしない。それを覆いかくしているのだが、かくしながらも、

それを人に想像させることをこころえている。彼女を見て、人は言う。つつましくて、おとなしい娘だ、と。けれども、彼女のそばにいるかぎり、人々の目と心は彼女の全身にそそがれ、そこから離れることはできないし、ごく簡素なその服装のすべての部分は、一つずつ想像によってとりのけられるようにそこにおかれているのではないかという気がする。」(第五編 P. 84)

以上がルソーの肖像として描くソフィーの家柄、容姿、趣味の概要についてであるが、それらの共通の特徴はソフィーの内面から滲み出る人間性の豊かさがあって、はじめてかもしだす品のよさである。すなわち、家柄のよさは彼女の性質の良さとなって、両親のすぐれた品性と人間性の豊かさを髣髴させる。また、彼女の容姿は内面の豊かさに加えて、均整のとれた身体と健康なかがやくばかりの容貌によって、心と身体の調和が娘ならではの自然美を最高に形成している。だから、「見ているうちにだんだん美しくなってくる。」「彼女は人を眩惑させはしないが、人の関心を引き起こす。彼女は人を魅惑する。しかし人は、それはなぜなのか言うことはできまい。」という内面からの美しさと人間的魅力をかもしだすのである。それは彼女の両親すなわちルソーの教育学による家庭教育の所産である。ルソーの女子教育は「肉体はいわば魂に先だって生まれるのだから、最初の教育は肉体についての教養でなければならない。」(第五編 P. 23) と身体の発達から心の発達へ、すなわち、遊びが身体と心の調和的発達を育てることからも全人的教育でなければならないことを指摘している。そして、ルソーは少年の頃からギリシャ、ローマの文化に心酔していたので、ギリシャの女子教育を全面的に取り入れて、少女たちをのびのびと活動させる家庭教育と社会的活動を奨励するのである。「楽しい、節度のある、健康な訓練によって、女性に幼いうちにすぐれた体質をあたえるすぐれた方法であり、また、悪い風習に染まるようなことにならずに、人を楽しませたいというたえざる欲求によって女性の趣味を刺激し、育てるすぐれた方法

であった。」(第五編 P. 24) とルソーがギリシャ、ローマーの教育に憧憬をこめて述べていることは、女子教育は身体と精神の全活動を通して家庭及び社会での経験を豊かにすることによって、人格と教養を養い身につけて、ひとたび結婚すれば家に入って、家事と家族のせわに専念する生き方が理想的な女性であるということである。すなわち、その理想的な母親にソフィーは教育されたのである。したがって、これこそ「自然と理性が女性に命じている生きかたなのである。」(第五編 P. 24)

それにソフィーの趣味についてであるが、彼女の豊かな趣味は彼女よりはるかに豊かな趣味を持つ母親との生活の過程で形成されたものである。たとえば、彼女が豊かな趣味をもっていて、じょうずに身じまいをする時、ぜいたくな衣装を嫌い、その衣装はいつも素朴さと優雅さとがかねそなわっている。また、流行にとらわれずに自分をひきたたせる色をよく知っていて、無造作に身じまいしているように見えながら、実に凝った服装をしている。要する彼女の趣味は自分の個性の理解のうえに成立していることからわかるようにひじょうにおしゃれなのである。だから、人々の目と心は彼女の全身にそそがれ、そこから離れることはないのである。それでは母親がどのようにソフィーを教育したのかということもまた、ルソーの人間主体の教育学によるのである。「衣服は人目をひくことはできても、人はその人自身によってのみほかの人を喜ばせる。わたしたちの着ているものはわたしたちそのものではない。」(第五編 P. 36)「飾りは体の美しさを補うものにすぎない、自分は人に気に入られるためにはなにかの助けを必要としていることを暗にみとめている証拠にすぎない、と考えることになれば、そのひとは衣装を誇るようなことはしないで、かえってそれを恥ずかしく感じるだろう。」(第五編 P. 37)「服装のことをよく知っている女性は、よいものを選んで、いつでもそれをもちいている。」(第五編 P. 38) すなわち、ソフィーは家庭に閉じこもって家族のために生きる母親の愛情による家庭教育で内面の感情を、豊かに形成しながら自分の個性を高

度に生かす趣味の内面化をはかっているのである。

さらに、ソフィーには生まれつきの才能がいろいろある。彼女はそれを感じていたので、きれいなその声で、正確にじょうずに歌うこと、かわいいその足でかるがると容易に、優美に歩くこと、どんな場合にもらかな姿勢で敬礼することなどを練習していた。それに、彼女には父親のほかには歌の先生はいなかったし、母親のほかにはダンスの先生はいなかった。だが、近くにいたオルガンの先生がクラヴサンで伴奏のしかたをいくらか教えてくれたので、その後、彼女はひとりでひきつづき練習をした結果、クラヴサンのかん高い乾いた音が自分の声の色をいっそうやさしいものにしていくのに気づき、彼女は少しずつハーモニーに敏感になっていった。やがて、大きくなるにつれて、表現の美しさがわかるようになり、音楽そのものが好きになっていくのである。だから、彼女は曲を音符で読めなくても、自分から学んだものは自分のものとして確実に身につけ、未完成なものは将来必ず自分のものとして完成させるための基礎はかためておくのである。したがって、ソフィーは自分の才能に気づくと、それをなおざりにしないで積極的にやってみるのである。そして、継続的に練習することによって、新しい境地を開くのである。この意欲と実践力は「生来の好みを妨げられることなくむしろそれを育てられてきた。」(第五編 P. 82) 両親のソフィーの天性に対する理解に基づく、彼女と共に学び合う家庭教育があつてのことである。それは、ルソーの「児童から」の教育主張そのものである。したがって、ソフィーの趣味は両親が家庭生活を通して、ソフィーの人格形成をはかる過程で、彼女の特徴を発見して、愛情をもって全人的に育ててきた人間教育の成果である。だから彼女の人格と趣味は一体化して限りなく精神性を豊かに育成するのである。「器用さと才能とによって趣味がかたちづくられる。趣味によって精神は知らずしらずのうちにあらゆる種類の美の観念にめざめ、やがてはそれに関連する道徳的な観念にめざめる。」(第五編 P. 44) すなわち、ルソーの天性と趣味の一致の教育理念は、

ソフィーの両親の家庭教育によってソフィーの美学を形成したのである。

(6) ソフィーの家事能力と家庭教育

「ソフィーがいちばんよく知っていること、なによりも念を入れて教えられもしたこと、それは、女性の仕事であり、ふつうには考えられないようなこと、たとえば、衣服を裁ったり縫ったりすることさえ教えられていた。縫針をつかってする仕事で彼女にできないことは一つもないし、喜んでしないことも一つもない。」(第五編 P. 85) とルソーは、ソフィーの家庭が家事を尊重するたぐいまれな家庭であることに敬意を表し、ソフィーの家事能力と家事に対する積極的な姿勢を高く評価すると共に、自分の教育原理が着実にソフィーの身体と精神に象徴されていることに満足している。事実、彼女はこまごました家事のあらゆることを積極的に勉強している。たとえば料理、配膳、品物の値段、品質の見分け方、家計簿の記帳などで、いわば母親の司厨長の役をしているのである。この彼女の家事に対する積極的な姿勢は自分はいつかは一家の理想的な主婦になるという人生の目的と自覚があつてのことである。だから、父親の家を管理しながら、将来に備えて自分の家を管理することを主体的に学んでいるのである。母親もまた、自分ができることでなければ、うまく他人を指図したり家庭を経営したりすることはできないという生活原理で、彼女に実際やらせる経験に基づく知恵を内面に育てるように指導している。しかし、ソフィーは母親の彼女への教育の真の意図にはいまだ気がつかない。それよりも彼女は娘としての義務をはたそうと心がけている。それは母親の役に立つことで母親の重荷をいくらかでも軽くしてやりたいという内面の感情が豊かに育てていることのあらわれであり、それは彼女の知性と理性をかぎりなく育てる大切な人間性の基礎となっている。

ソフィーが母親から意欲的に家事を学び、研究的態度で家事に専念することによって、家事に精通した過程が娘としての義務を自覚するようにな

るということは、両親との家庭での生活と教育の融合が、彼女の精神を目ざめさせ育てたからである。したがって、ソフィーの家庭には両親の人格の一致による家庭教育と彼女と両親との愛の世界があるということである。そのことについてルソーは「女子教育は心配せずに女性にまかせるがいい。女性に同性の世話を好ませるがいい。つつしみ深い心をもたせるがいい。家事に気をくばり、家のなかの仕事に心をむけることができるようにならせるがいい。」(第五編 P. 39) と娘の微妙な感情と心理を理解できるのは母親だけであることを述べているのは、夫婦の人格の一致があつてのことである。したがって、ソフィーの母親は自信をもって、ソフィーの教育を、「娘はいつでも従順でなければならないが、母親はいつでもきびしい母であつてはならない。幼い女性を従順な娘にしようとして、不幸な娘にしてはいけない。つつしみぶかい女にしようとして、愚鈍な女にしてはいけない。」(第五編 P. 33) という、娘を理解し愛することから教育を始めたのである。その過程は夫婦によるソフィーの理解と教育の協力であり、夫婦の経験を生かす家庭教育の創意工夫であつた。すなわち、ソフィーの性格と希望を尊重して、夫婦の英知を結集しての教育観の一致による母親の女性の誇りを教える生活教育である。

それでもソフィーは家事の中で嫌いなものがある。それは料理である。料理のこまごましたことにはなにかしら彼女に嫌悪を感じさせるものがある。清潔さがみいだせないからである。同じ理由で彼女は菜園の堆肥からいやな匂を感じるの、土が不潔に見えることから菜園を見廻るのをさけるのである。この彼女の異常な清潔感「母親に教えられたことがもとになっていた。彼女の母親の考えでは、女性の義務のなかで、たいせつなことの一つは、清潔ということだ。それは自然から命じられた、免れることのできない特別の義務なのだ。不潔にしている女ほどいやらしいものは世の中にはないし、そういう女に愛想をつかす夫はけっしてまちがっていることにはならない。母親は娘に子どものときからやかましくその義務を

教え、体を清潔にするように、衣類、部屋、仕事、身じまいについても、それをやかましくいつけたので、それに十分に気をくばるのが習慣になって、彼女はそのためにかなり長い時間をとられ、ほかの時間にも、そのことばかり気にしているのだ。だから、なにをするにしても、彼女には、よくするということは二次的にしか考えられず、清潔にするということがいつも真先に考えられるのだ。」(第五編 P. 86) という母親の教育すなわちルソーの女子教育論は、女子の躰にきわめて厳しいのである。それはもちろん、男性のためにではあるが、一方ルソーの生きた18世紀の男女の社会的立場の矛盾を打破しようとするルソーは、女性の社会的活躍の場を家庭に求めて、その実力のほどを社会に認めさせることによって、女性の手で男女の社会的地位の矛盾の打破と女性の社会的地位の向上をはかろうと意図していたからでもあると考えられる。

したがって、ルソーはソフィーの母親の家庭教育を、全面的に肯定する教育論を次のように述べている。「女性によって、男性の品行、情念、趣味、楽しみ、幸福そのものさえも左右される。そこで女性の教育はすべて男性に関連させて考えられなければならない。男性の気に入りに、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる、こういうことがあらゆる時代における女性の義務であり、女性の子どものときから教えなければならないことだ。」(第五編 P. 21) 「少女たちに仕事をいつけるばあいには、いつでも正しい理由を告げるがいい。しかし、かならずそうするように命令するがいい。なんにもしないでいることと、いうことをきかないこととは、女の子にとってなによりも有害な欠点で、そういうくせがついてしまうと、なによりも改めることがむずかしい。女の子はよく気をくばり、よく働くようではなければならない。それだけではない。はやくから束縛に甘んじなければならない。この不幸は、女の子にとってそれが不幸といえるならばだが、女性にかならずついてまわることで、そ

れをまぬがれれば、かならず、はるかにつらい不幸に苦しまなければならない。」(第五編 P. 30) 以上のルソーの女子教育論からも理解されるように18世紀のフランスの男女の社会的地位の格差は歴然たるものがある。その社会規範をよく理解している母親は、その社会に適応するための教育と夫婦の協力のための妻のあり方との両面から、ソフィーの教育に自分の姿を見せることによって生活に即した経験中心の実践教育をしたのである。つまり、女性の主体性と実力の養成である。したがって、ソフィーの母親は娘を愛し、幸福にしてやりたいと思えば思うほど、その家庭教育は厳しくせざるを得なかったのである。

それにソフィーと母親の関係は「世の中のだれと一緒にいるよりも母親と一緒にいることをいっそう喜ばないような少女が将来りっぱな女性になれるというのはひじょうにむずかしいことだ。」(第五編 P. 31) というルソーの逆説が強調しているように母親思いのソフィーは、自分のなすことを立派に行うことは第二義的な心づかいにすぎなくて、第一義的な心づかいはつねに母親の教育に順従に何事も清潔に行うということであった。彼女の清潔に対する姿勢は全人的で自分のすべてであることから、それに彼女の母親の期待に完璧に応えるいたいたしいまでの精進からも素直で誠実な性格が感じられる。また、母親の彼女に対する家庭教育の理念は、彼女の夫になる男性に愛され尊敬される女性としての人柄を育成することである。したがって、清潔についての指導のねらいも、「彼女は花の香りのほかには香りを知らないし、彼女の夫は彼女の息より快いものを吸うことはあるまい。」(第五編 P. 86) という夫に対する彼女の人格の外面と内面の完全な一致の形成である。すなわち、ソフィーの人格(性格)は外的清潔と内的清純によって形成されていることから、男性の人格と能力を超える人間的实力で、男女の社会的規範を超越した夫婦の一致による男女平等の家庭の創造を可能とするのである。そして、そのことにソフィーはやがて気づき、母親の家庭教育の原理に畏敬して、それを自分の家庭教育の原

理とするのである。

(7) ソフィーの健全な身体と精神の育成を目指す家庭教育

したがって、「ソフィーには輝かしいものではないが快い精神、深遠ではないがしっかりした精神がある。人の話題にされることのない精神、というのは、彼女のうちに人は自分よりもすぐれた精神も劣った精神もみいださないからだ。」(第五編 P. 88) とルソーはソフィーの地味で円満な女性らしい性格が着実に形成されていることを確認してエミールの妻としてのソフィーに満足している。そして、その彼女の性格形成が両親との家庭生活における会話と協力と彼女の反省とさらに、生活を通して触れ合う少数の人々についての観察と心の交流による交際とによって形成されていることを指摘している。すなわち、ソフィーの性格は信頼と親交の生活を中心に形成されているのであって、読書などの知識によるものではなく母親の人柄とその教育に負うところが大きい。また、ソフィーのおいたちは生まれつき快活で、子どものころにはふざけ好きであった。そこで、「母親は、すこしずつソフィーの浮わついた態度を落ち着かせるように心がけた。やがて、あまりにも急激な変化がそういう心づかいを必要としていた時を教えるということになってはいけなからだ。だから、彼女は、つつましく控え目になる時期がまだこないうちからそうなった。」(第五編 P. 88) という母親の家庭教育の理念は、生涯教育の観点で、ソフィーの性格形成を彼女の成長過程を通して理解を深めながら心に余裕をもってあせらずに相互理解を深め、愛を培うことから始めることに生かしたのである。したがって、その教育はソフィーのこれからの成長を正しく展望させることになり、発達に即した教育になったのである。それはすなわち、教育を受けるソフィーにとっては、余裕をもって自分の自然の成長を自分で育てるということになったのである。したがって、母親の「ソフィーから」の教育は、ソフィーの性格形成の理念として彼女の内面に根づいて、母と娘の望

ましい人間関係の形成に活用されつづけるのである。

それに、「彼女はまた、気まぐれなところが全然ないわけではない。すこし気分が高ぶると、それは反抗に変わって、自分を忘れるようなこともしかねない。けれども、自分にかえる余裕をあたえてやれば、自分の過ちをつぐなう彼女の態度は、その過ちを一つの手柄とさえ考えさせる。罰を受けると、従順にそれに耐え、彼女の恥ずかしさは罰を受けたことではなく、よくないことをしたためであることがわかる。なにも言わなかったとしても、彼女は自分から過ちをつぐなうことをけっして忘れない。」(第五編 P. 89) という感受性の強さと気まぐれな性格が自分にあることを彼女は知っている。そして、彼女は自分の性格が感情的になると、自己抑制を失って反抗的になることから、そのようなことがあってはならないと、たえず自分の変容を「自分から」はかっている。だから、彼女は自分の過ちの本質を悔い厳しく反省し、心からつぐなうのである。その態度は率直で悔恨の情もあきらかであることから、人は彼女を責めることはできないのである。すなわち、彼女の性格は、素直で裏表がなく、たえず自分の性格の向上を願い、的確な判断のもとに人間関係を良好にしたいと努力している。すなわち、ソフィーは自分の行為についての罰と不徳の違いを本質的に理解して、自分から過ちをつぐない、女性の好ましい天性を備えるよう「自分から」自分を育てている。

(8) ソフィーの精神性と美德による結婚観

ソフィーの「しんぼうづよく他人の過ちに耐え、喜んで自分の過ちのつぐないをする。」(第五編 P. 89) 女性の天性ともいえる性格は、両親の家庭教育と「自分から」の自己教育の生活の過程で、信仰、美德などの精神性を彼女の内面に養い深めるのである。そして、彼女は自分の精神生活を豊かに形成するために、的確な判断に基づく主体的な自分の生き方を求めて、内省に日々精進するのである。だから、宗教の教理を知らない彼女は、

「よいことを行うことによって、生活のすべてを捧げて神に仕えている。」（第五編 P. 90）と共に両親は、「こういう知識はあなたの年ごろにはよくわからないものだ。適当な時がくればあなたの夫になった人がそれについて教えてくれるだろうと。また、長々と信仰の話をするようなことはしないで、両親は、自分たちが示すお手本によって教えを説くだけになっているが、そのお手本は彼女の心に深く刻みこまれている。」（第五編 P. 90）のである。したがって、彼女は敬虔な気持ちで生活のすべてを捧げて神に仕えると共に、その教理を説き聞かせてくれる理想とする夫を心に描きながら、清純な精神性を自分の内面に養って倦むことをしらないのである。

したがって、ソフィーの「内面の感情」は両親の家庭教育によって、美德を着実に高揚し内面化するのである。すなわち「ソフィーは美德を愛している。その愛は彼女のなによりも強い情熱となっている。美德よりも美しいものはなにもないからこそ、彼女はそれを愛しているのだ。美德は女性に名誉をもたらすからこそ、そして有徳な女性はほとんど天使にひとしい者に見えるからこそ、彼女はそれを愛しているのだ。美德は幸福へみちびくただ一つの道と考えて、また、恥しらずな女の生活には悲惨、孤独、不幸、汚辱しか見られないからこそ、彼女は美德を愛しているのだ。」（第五編 P. 90）だから、ソフィーの両親への敬愛の念は深く、両親が美德による夫婦生活で自分を育て教育してくれたことは、両親との家庭生活の清らかな信頼と愛の交流による満ちたりた幸福感と感謝の体得である。それはすなわち、彼女は、自分の幸福を両親が自身の幸福としている親心を心底わかっているからである。そうであるからこそ、彼女は両親を誇りに思い自分が幸福になることによって、両親の希望をに應えるために、「そういう感情のすべてが彼女にある感激をあたえ、彼女の魂を高めさせ、彼女のいろいろな小さな好みをすべて高貴な情熱に服従させている。」（第五編 P. 91）のである。それはソフィーが生涯を通して貞潔に生きる覚悟の現れであり心の誓いである。この誓いこそソフィーの心に描く理想の夫とな

る男性への誓いなのである。

それだけでなくソフィーの体質は同じ年ごろの他の娘より、なにごとにおいても早熟で、心身共にすぐれた成長を示している。なかでも判断力にすぐれていたもので、自分の人生の幸福を考えて、理想的な心の伴侶について自らの英知を結集して一人思案にくれるのである。彼女には一人の愛してくれる男性が必要なのである。その人はまじめで生涯自分を愛しつづけてくれる人でなければならないのである。だから、彼女が描く男性像は彼女の人格と教養とそして結婚観の結集であるが故に得難い男性である。

「ソフィーは女性と男性との義務を教えられている。男性の欠点と女性の不徳を知っていて、それをすべて心の底に銘記している。品行の正しい女について彼女がいただいている観念よりも高い観念を人はもつことはできないのだが、その観念も彼女を脅えさせはしない。けれども彼女は、品行の正しい男性、すぐれた男性のことを考えていっそううれしい気持ちになる。自分はそういう人のためにつくられていること、そういう人にふさわしい女であること、自分はその人からうける幸福にむくいることができること、そういうことを彼女は感じている。自分はその人をきっと見わけることができる、と彼女は感じている。」(第五編 P. 92) だから、彼女にとって問題は、ただその人にめぐりあうことだけなのである。したがって、彼女は自分の若さと経験の乏しさを自覚して、自分の境遇にふさわしい謙虚な態度で、的確な判断に従って機会有るごとに男女両性と交際することによって人間理解を深めるのである。それは、やがてめぐりあうであろう心の伴侶とのであいをまちがいなくとらえるためにである。それには、清純な心と清潔な身体で自分のためにのみ存在し、なお、人格の完成に精進するその男性にむくいなければならないのである。したがって、ソフィーはなんとしても二人の高貴な魂の純粹な愛の高まりの中でその人にめぐり会いたいのである。

そこで、ソフィーは社交界でのしきたりはよく知らなくても、だれに対

しても自分の天性を生かして、親切な心からの配慮としとやかな態度で交際するようにしているのである。したがって、彼女の礼儀は彼女の内面からの真心のこもった礼儀であって形式ではないのである。「それは形式にこだわらず、流行にしばられず、流行とともに変わることもなく、なにごともしきたりによってするようなことはしない、人に喜ばれようとするまじめな願いから生まれた、人に喜ばれる礼儀だ。」(第五編 P. 93) だから、ソフィーは婦人に対してばかりでなく、既婚の男性に対しても口数を少なくして、尊敬に満ちた礼儀正しい態度を信条として応対しているのである。特に年長者には尊敬されなければならない知恵があるものと考え、年齢に伴う権利は性に伴う権利に優先するとの認識のもとに、心からの尊敬の念を礼儀に表現するのである。なお、彼女は同じ年ごろの青年だからといって態度を変えることはしないのである。もしも彼女が、彼等から尊敬されたいと思うのならば、彼女はちがった態度をとる必要があるのだろうが、彼女はいつもと同じように自分にふさわしいつつしみ深い態度で臨むのである。それは彼女の内面に、「女性の権利ということについて彼女がいただいている高貴な見解、純粹な感情が彼女にあたえている誇り高い魂、彼女が自分のうちを感じている、そして彼女を彼女自身の目にも尊敬すべきものと感じさせている力強い美德」(第五編 P. 95) を自覚しているからである。だから、相手の意図と態度によっては、たとえ男性からのほめことばであっても毅然たる態度で、鄭重にたしなめるのである。

たとえば、つつしみ深い控え目な青年であるならば、彼女は喜んで親しみを持ち話は陽気なものになるだろう。そしてまじめな話になるならば彼女はそれが有益なものとなることを願うだろう。逆につまらない話になってくると、彼女はすぐに話をやめさせてしまうだろう。なぜなら、彼女は女性のごきげんとりのくだらないたわ言は、女性を侮辱するものとして軽蔑しているからである。それに、彼女の心の奥底には長年にわたって彼女の理想と美德が描いた男性が深く刻みつけられて人格化されているのであ

る。だから、その理想の男性ならば決して言わないであろう軽薄なことを言う男性の話は、自分と心の理想の恋人とが汚されるように思えて聞いていられないのである。要するに想像上の男性とはいえ、その人は彼女の精神的支えであり、恋人であるから彼女は貞潔な人生を伴に生きているのである。

したがって、両親のソフィーの家庭教育が、彼女に理想的伴侶としての男性を心に描かせる精神を内面に養ったことは、ルソーの教育が目指す人格的結婚に照して、高く評価されるのである。すなわち、ソフィーの母親は和やかな家庭を創造し、夫からは愛され尊敬される妻であり、そして、ソフィーをやさしい心で愛育する母であることから、ルソーにとっても理想の母親なのである。まして、エミールの伴侶となるソフィーを「愛を敬意によって支える女性」（第五編 P. 82）にまで育てた母親はルソーの母親の理想そのものである。つまり、ソフィーの母親をあたかも現実の一個人格であるかのように描いたルソーは、その母親に自分の教育の理想を思う存分発揮させるのである。したがって、著者ルソーはソフィーの母親の中にいるのである。もちろんその夫そしてソフィーの中にもいるのである。そして、その母親の教育が『エミール』の冒頭で「教育は自然か人間か事物によって与えられる。」その三種の教育の一致でソフィーの人格をエミールの伴侶にふさわしい女性に教育することを願っている。したがって、ルソーの理想とする「一家の母にふさわしいひとは、社交界の女性になるようなことはしないで、修道院にいる修道女とほとんど変わらないくらい家の中にひっこんでいる。」（第五編 P. 70）そのような賢明な母親の一人がソフィーの母親なのである。だから、その母親はこれから結婚する娘ソフィーには「快樂を断念させるまえに、見捨てることになるその快樂を見せてやることだ。そうしないと、彼女たちが知らない快樂のいつわりの姿がいつか心を惑わし、ひきこもった生活の幸福をみだしにやってくるおそれがある。」（第五編 P. 70）ことを自分の娘時代と妻としてまた、母

親としての人生経験から理解しているので、自信をもって娘に見せるのである。たとえば、舞踏会、宴会、芝居などの社交的な場所は思慮にとぼしい若い人には快樂となり魅力となって幻想をいだいて自分を見失うおそれがあるとしても、健全な思慮深い娘の目にはそれは自分としての正しい生き方を考えるための貴重な社会経験として、生かすのでなんら危険ではないからである。問題はそれを見ても心を動かされないように前もって十分によく娘を教育しておくことである。だが、「わたしに反対して叫ぶやかましい声が聞こえてくる。」(第五編 P. 71) ことをルソーは先刻承知しているのである。

そこで、ルソーは自分の教育を批判する母親たちの家庭教育について反省を促すのである。「心を迷わせるいつわりの趣味から娘たちを護ってやるために、あなたがたはどんな用心をしたか、どんな方策を講じておいたか。一般の偏見の影響に対処できるものをなにか娘さんたちの心に植えつけるどころか、あなたがたはその偏見を育てていた。やがてわかってくるあらゆるくだらない楽しみを、娘たちに見ないうちから、好ませるようなことをしていた。さらに自分がそういうことにうちこんで、それを娘たちに好ませるようなことをしている。社交界には行っていく若いひとたちには母親のほかには付き添いはいないのだが、その母親はたいてい娘たちよりもさらに頭がくるっていて、自分の見方とはちがう見方で娘たちにものごとを見させることはできない。理性そのものより強くはたらく母親の手本は、娘たち自身にたいし娘たちを弁護し、母親の権威は娘にとって反駁の余地ない弁解となる。」(第五編 P. 71) のも家庭を顧みない母親の内面の感情の未熟さからの自己中心的行為と、それを如実に反映する心の荒廃とすさんだ家庭教育によるものである。したがって、理性に勝る母親の実像による娘への影響感化を娘の教育に生かすためには、母親は家庭に在って誕生からの娘の発達に従って、世間が認める良識に即した行為と健全な精神を養い育てなければならない。それには、子どもの時から和やかな家

庭生活の中で、母と娘が家事を共にしながら家族との会話を通して、内面の感情を理解し合って情緒の安定のなかで自分を知ることである。要するに母親の愛情が創造した家庭で母と娘が生活する過程が美德の涵養となり、それが娘に愛する伴侶との家庭を夢と希望をもって想像させ、結婚によって自分の家庭を意欲的に創造させるのである。さらにルソーはソフィーの母親の教育について「和やかな家庭生活を愛するためには、そういう生活を知っていなければならない。子どものときからその快い雰囲気を感じていなければならない。生家にいてこそ自分の家にたいする好みをもつことになるのだし、母に育てられなかった女性はみんな、自分の子どもを育てることを好まない。」(第五編 P. 72) と母と娘の関係のあり方が娘に家族と家庭の望ましいあり方を具体的に体得させ、その人生を方向づけることについて述べている。

そして、ルソーはソフィーの生活環境と家庭教育について、「大都会では墮落は生まれると同時に始まり、小さな都会では理性の時期とともに始まる。」(第五編 P. 73) と述べることによって、子どもの教育にとっての環境の意義について、都会にはもはや人間形成の基礎となる自然と家庭教育が存在しないことを指摘すると共に、ソフィーの自然と素朴で堅実な風俗習慣にめぐまれた地方の環境の中での生活と教育を、人間形成の理想であることを強調している。事実ソフィーの生まれつきの才能は自然の中で、だれにも邪魔されることなく両親の愛情につつまれ母親によって、女性の仕事を中心に教育されているのである。その経験と教育からソフィーは母親の重荷をいくらかでも軽くしてやりたいと思う、愛情や清潔感などの内面の感情を地方の変化に富んだ自然の中で経験を通して豊かに育みながら、地域の人々との解放的な人間関係の中で、自らの人格と精神を内面に深く育てたのである。すなわち、ソフィーの趣味、技芸、家事能力、性格、信仰、判断力などが、彼女の美德を形成して、快よいしっかりした健全な精神を形づくったのである。だから、ソフィーをパリに連れていっても、パ

りの頽廢した習俗や不徳に影響されることなく、それを選択して自分の教養に取り入れると共に、自分の地方での生活環境のよさを再確認するのである。そして、彼女は自分の生活の場が美しく清らかな自然環境の中での、両親との愛情に満ちた生活であることをあらためてありがたいと思い、そこで両親から培われた自分の精神を誇りに思い満足するのである。したがって、ソフィーは両親の教育がいつも自分の自然の感情を大切に育てる愛情のこもった温和な表情と具体的でよくわかる体験的生活を通しての心にしみる指導が印象的であると共に、心の交流からしみじみと教えられた「女性の義務そのもののうちに女性の喜びの源と、女性の権利の拠りどころがあること」(第五編 P. 75)などを反芻して、今日の自分のあることに思いをはせて、両親の愛と自然の恵に感謝しないではいられないのである。

そこでルソーはソフィーに女性が愛に生きるための美德の真意と価値について気づかせるのである。「愛されたために愛すること。幸福な者になるために愛すべき者になること、服従させるために尊敬すべき者になること、自分に敬意をはらわせるために自分に敬意をもつこと。」(第五編 P. 75)などの人間の存在意義である愛と尊敬の美德を彼女は自分の精神とするのである。そしてそれは同時に「女性がそれを持ちいることをこころえているなら、それは男性の心にとってどんなに貴いものとなることか。」(第五編 P. 76)という男性が女性の美德を求める真実に応えるために、彼女は自分の内外を美德で魅力ある女性に形成するように精進するのである。また「女性は生まれながらにして男性の価値の判断者である。……女性に軽蔑されたいと思っている男性があらうか。」(第五編 P. 76)という男女の内面の自然の感情からも女性は誇りをもって、男性の真心に正対しなければ、愛を失うことになるので、女性は内面に美德を養うことによって、それを外面に美しく表現する意義をあらためてソフィーは肝に銘ずるのである。

さらにルソーは「美德は恋愛にとっても、ほかのあらゆる自然の権利に

とってと同じように、有利であること、それによって愛人の権威も妻や母の権威と同じように大きくなることを主張したい。感激がなければほんとうの恋愛はないし、現実のものにせよ、架空のものにせよ、いずれも想像のうちに存在する完璧な対象がなければ、感激はない。その完璧なものになんの意味も感じなくなって、愛するもののうちに官能の喜びの対象だけを見ている恋人たちはなにに情熱を感じることになるのか。いや、そんなことでは心は燃えあがりはしないし、恋人たちの狂乱と、かれらの情念の魅力を生み出すあの強烈な興奮にとらえられもしない。恋愛においてはすべて錯覚にすぎない。たしかにそうだ。ただ、現実にあるのは、恋を感じさせるほんとうに美しいものにたいしてわたしたちを興奮させる感情だ。その美しいものは愛する対象のうちにはない。それはわたしたちの心の迷いから生まれる。しかし、それがどうだっていうのか。それでもやっぱり人は、想像から生まれるその完璧なもののために、あらゆる卑俗な感情を捨てることになるではないか。いとしいひとがもっていると考えられる美德に感動させられることになるではないか。人間の自我の卑劣さから離れることになるではないか。愛する女のために自分の身を犠牲にしようとはしないほんとうの恋人がどこにいるのか。そして、死を求める男のどこに粗野な官能的な情熱があるのか。」(第五編 P. 77) と女性の美德が恋愛の精神であることを説いている。すなわち、男性は恋人の美德によってその恋に感動し燃焼するからこそ、女性の美德に応える精神活動は様々な葛藤を経て内省を深めるのである。したがって、男性は自我の卑劣さを浄化して恋人にふさわしい純粋な自分になるよう、自己改革と人間的変容に精進するのである。要するに、女性の美德は恋愛を通して男女の精神の深化と完璧な愛の結晶を祈願して二人の精神的世界を創造するのである。

そこで、ソフィーは両親すなわちルソーの教えから男性の恋愛が女性の美德を対象としての精神的営みであることを知って、自分の人格と美德との一致について深く反省すると共に、自分の内面に人格と美德の一致によ

る自分を形成する真の意味を思索し始めるのである。そして、自分が目指す女性の美德の具体的象徴は「節度もあり、好ましくもあり、賢明でもある女性、思いを寄せる男性たちに尊敬を感じさせずにはおかない女性、控え目でつつましい女性、一言でいえば、愛を敬意によって支える女性」（第五編 P. 81）であることから、ソフィーはそうなるように決意を新にすると共に、自分の人生をかけて心に描いた恋人との想像上の恋愛について思いをめぐらすのである。そして、その恋人もやはり自分の美德に仕えることができる精神的な人であるからには、自分の美德のよき理解者として、自分を愛し自分に仕えてくれる恋人でなければならないのである。だがしかし、彼女が美德と恋愛について理解を深めれば深めるほど、自分が描いた恋人がはたしてそうであるか否かが、疑問となり不安は増すばかりであった。したがって、ソフィーは両親すなわちルソーによって、「男性が女性の価値の判定者として生まれているように、女性は男性の価値の判定者として生まれている。」（第五編 P. 92）自然の原理に従って教育されたことから、男性の価値の判定者としての美德を内面に培ってきたのであが、彼女はあらためて男女の自然の原理とその教育について熟慮するのである。それは両親の教育が自然の原理に従って自分を教育した理念についてである。そして彼女は、何よりも自分が自分の自然を育てなければ自分の人格と美德の一致はあり得ないことに気づくのである。それはすなわち、やがて自分が心に描き育てた恋人に現実としてめぐり会って、そして、恋を育て合う過程で自分が人生をかけて培ってきた「男性の価値の判定者」としての自分の人格と美德が無力であってはならないための両親の教育であったことを悟るのである。かくの如く思慮深く成長したソフィーは「ひじょうに成熟した判断力を持ち、あらゆる点で二十歳ぐらいにできあがっている十五歳」（第五編 P. 96）の娘である。そしてルソーとエミールが描くソフィーは、間もなく心に描き育ててきたエミールにめぐり会うのである。

このようにエミールとソフィーはたがいに相手を理想の恋人として心に描いて、たがいに自分の美德の形成の過程で愛を育ててきたのである。そして、めぐり会い結婚するのである。したがって、ルソーの人格的結婚は男女がそれぞれ自分の人格と美德の一致の形成に精進することによって、心に理想の恋人を描き育てなければ成立しないという結婚観なのである。それは大変困難な道程のように考えられるが、人間の誕生から始まる教育が自然の原理に従ってなされるならば、自然に到達するはずのものなのである。すなわち、人格的結婚は男女の協力による幸福の創造であるがゆえに、男女は相互に協力に価する相手の人格と美德を求めることは自然の感情そのものであって、男女の自然の感情はどこまでも自分の人生を自然の原理に従って歩もうとしているのである。だから、教育が自然の原理に従ってなされなければ、エミールとソフィーの人格と美德の形成も完成されないことになるので、当然人格的結婚も存在しないことになる。それは人間にとって絶望的で、そうであってはならないのである。すなわち、ルソーは誕生以来自分が切望した自分自身への自然の教育を完全に無視されたことによる苦悩の人生から、人間の幸福は自然の教育によって実現されることを確信して、その教育を想像上のエミールとソフィーに託したのである。すなわち、それが人格的結婚を目指す自然の教育なのである。

本論中のルソーの引用文は岩波文庫『エミール』今野一雄訳に拠った。

『教育観の転換——ルソーの視点から——』

押村喪著 早稲田大学出版部。本論執筆にあたって、学友の本著書から多くの示唆を得たことについて、感謝している。